

# NACSIS-CAT における著者名典拠データの記述方法

酒井清彦・京藤貫  
国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課

1. 標目の形
2. 付記事項
3. 異なる形への参照
4. 注記
5. その他の特徴
6. 主要な目録規則との比較

## 1. 標目の形

NACSIS-CAT においては、個人名、団体名、会議名を問わず、あらゆる著者名典拠の標目は、HDNG フィールドに記録される。HDNG フィールドのデータ要素には 3 つの種類、統一標目形、付記事項及び統一標目形の読みがある。しかしながら、これらはそれぞれに独立したサブフィールドが用意されているわけではない。それらは、一つのフィールドの中で、区切り記号によって区別されて記録される。

標目のタイプによって以下のように形が異なる。

### (1) 個人名の場合

日本名の場合（「日本名」は、「日本目録規則」を適用する名前のことを指す）  
通常「姓，名（付記事項） 姓の読み，名の読み 姓のその他の読み，名のその他の読み」の形となる。

（例） 五百旗頭，真(1943-) イオキベ，マコト  
張，愛玲(1921-1995) チョウ，アイレイ zhang, ai ling

日本名以外の場合

通常「姓，名（付記事項）」又は「姓，名，付記事項」の形となる。

（例） Lawrence, D.H. (David Herbert)  
Smith, John, 1837-1896

### (2) 団体名、会議名の場合

日本名の場合

通常「団体名又は会議名（付記事項） 団体名又は会議名の読み 団体名又は会議名のその他の読み」となる。

（例） 日本総領事館（在サンフランシスコ） ニホン ソウリョウジカン

日本名以外の場合

通常「団体名又は会議名（付記事項）」となる。

- (例) Roosevelt Junior High School (San Francisco)  
Louisiana Cancer Conference (2nd : 1958 : New Orleans)

データの記録形式としての基本的な形は上記のとおりであるが、記録される名称の形によって、さらにいくつかのパターンが生じる。日本名個人名について見てみると以下のようなになる。

(1) 単純な形の場合

姓と名の間に、「 , (カンマ, スペース)」を入れて記入する。

- (例) 吉田, 一彦(1936- 教員) ヨシダ, カズヒコ

(2) 姓及び名のように慣用される名称の場合

画号, 雅号, 俳号等と姓もしくは名が一緒になって用いられ, 全体で姓名形のように慣用されている名称は, その名称を姓名形とみなし記録する。

- (例) 正岡, 子規(1867-1902) マサオカ, シキ

林家, 正楽(2代目 1935-) ハヤシヤ, ショウラク

また, 役職, 官職等と姓もしくは名が一緒になって用いられ, 全体で姓名形のように慣用されている名称は, 役職, 官職等と姓もしくは名とは切り離さずに全体で一語とみなす。

- (例) 和泉式部 イズミシキブ

弁内侍 ベンノナイシ

(3) 姓及び名に模した, あるいは擬した名称

実際の姓名ではないが, 実際に存在する姓名であるかのような形をしたペンネームや芸名等の名称については, それぞれの要素を姓と名とにみなして分離し, 姓名形として記録する。

- (例) 岡嶋, 二人 オカジマ, フタリ

十返舎, 一九(1765-1831) ジッペンシャ, イック

また, 姓と名に分離することが困難な形をした通称やペンネームや芸名等の名称については, 全体を一語とみなして記録する。

- (例) ビートたけし ビート タケシ

ジェームズ三木 ジェームズ ミキ

(4) 姓名形を取らない名称

名称の全体を持って一語とする。あるいは, 目録対象資料に記されている形をそのまま転記する。

- (例) ムツゴロウ

(5) 天皇・皇室の名称

現行の天皇, 皇室の名称は, 「天皇陛下」「皇后陛下」とし, それ以外の名称は, 名称の全体をもって一語とする。「上皇」等は使用しない。

- (例) 天皇陛下 テンノウ ヘイカ

昭和天皇(1901-1989) ショウワ テンノウ

(6) 仏家, 僧侶の名称

最もよく知られた名称を採用する。一般的には法名, 法諱等の名称を採

用する。尼僧における「尼」は切り離さず全体を一語とする。  
(例) 空海(774-835) クウカイ  
慧信尼 エシンニ

## 2. 付記事項

付記事項とは、同名異人を区別する際に用いる情報であり、その情報を付け加えなければ他の標目と区別できない場合に用いられる。

付記事項には、生没年、職業、専門分野、世系、貴族の称号・尊称・敬称、イニシャル形の名前に対する完綴形等の種類がある。これらの種類に応じて、標目における記述の仕方が変わっている。

例えば、日本名であれば、生没年、職業、専門分野、世系等は丸括弧に入れて記述するが、日本名以外であると標目の後に「, 」で続けて記述することになっている。

一般に、標目に付記事項として記録することができる情報がある場合、その標目が既に作成されているものであるのか、新規に作成されるものであるのかによって、記録の方法が異なっている。すなわち、これまでの目録の伝統においては、既に作成され確立している標目についてはなるべく訂正せず、後出の標目の方に付記事項を付することで区別を行うようにしてきている。また、新規に作成する場合であっても、その標目が付記事項なしでも他との区別が可能であれば、付記事項に当る情報が入手できたとしても記録しないのがこれまでの目録の伝統であった。

一方、NACSIS-CAT においては、新規に標目を作成する場合には、将来的に他の標目と区別する必要が生じることを考慮し、入手できた情報については可能な限り付記事項として記録しておくように運用している。なお、既に作成されている標目に対する扱いは従来と同様である。

なお、NACSIS-CAT では、MARC レコードのように、世系を表す\$b, その他の付記事項を表す\$g, さらに生没年を表すフィールド 301\$a (以上は JAPAN MARC の例) といった具合に付記事項の種類によってサブフィールド化されていない。

## 3. 異なる形への参照

通常、著者名典拠レコードの標目として、「原則として最初に目録記入を作成するとき、その資料に表示されている形」「著名な、あるいは著作の多い著者については、(中略)参考資料等において多く用いられている形、多くの著作で一致している形」(いずれも「日本目録規則」による)もしくは、「その個人がよく知られている名前」(「英米目録規則」による)が選択される。これに該当しないその他の名前は全て標目の異なる形である。

ただ、異なる形といってもそのレベルは多様である。ペンネームとして別の名前を使用する場合や改姓改名をしている場合もあれば、名前の読み方の違い、漢字における新旧字体の違い、スペリングの違い等の細かい相違もある。

ペンネームの場合や、改姓改名の場合は、別名のほうでも標目として作成されていることが多く、お互いに作成された著者名典拠レコード同士を参照しあ

うことになる。このように参照しあうために「からも見よ参照 (See Also From)」が作成される。それ以外の場合は、作成された著者名典拠レコードに辿り着かせるため、検索用として「から見よ参照 (See From)」が作成される。

NACSIS-CAT における、これらの参照形の作成状況は以下のとおりである。

	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6-10回	11回-
SF	737,232	260,096	86,037	32,029	13,405	7,062	10,242	1,808
SAF	1,126,438	17,645	2,963	534	160	56	91	24
合計	1,863,670	277,741	87,000	32,563	13,565	7,118	10,333	1,832

「から見よ参照」のうち、適用する目録規則の違いによって標目形が異なる場合に作成する参照形（例えば、日本目録規則を適用する資料に対して作成される英米目録規則形の標目）は、異なる形としての情報の中でも、目録規則に基づいて正規化された形であるため、検索用として重要である。

なお、細かい相違のうち、漢字における新旧字体の違いに基づく参照形については、NACSIS-CAT が内部に、漢字の字体の相違を吸収するインデックス、漢字統合インデックスを実装したことで作成が不要となっている。

#### 4 . 注記

注記は、一般的に記録することは任意であるが、当該書誌及び当該典拠レコードがどのような観点に基づいて作成されたものであるかを判断できる重要な情報である。

著者名典拠レコードの場合、標目形がどの資料のどの部分に表示されていた形であったのか、さらに標目形の中で表現しなかった個人に関する情報、例えば具体的な職業又は身分、経歴などが記録されることになる。

NACSIS-CAT では、著者名典拠レコードを作成又は修正するに至った根拠情報を記録必須な項目としている。著者名典拠レコードを新たに作成した場合には「SRC」、修正した場合には「EDSRC」に続けて根拠資料についての書誌事項を自動的に埋め込むようになっているので、目録作業者は埋め込まれた情報に、資料のどの部分を根拠としたか、あるいはどのように修正したかを追加記録すればよいことになっている。この記録はそのまま著者名典拠レコードの修正履歴ともなる。

NACSIS-CAT の著者名典拠レコードにおける注記の出現回数は以下のとおりである。

	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6-10回	11回-
ORG	29,400	314,969	78,278	19,333	4,844	1,328	673	38
JP	121	18,565	26,327	29,386	4,430	1,115	403	3
LC	1023	234,186	232,021	100,908	31,291	10,732	7,283	355
合計	30,544	567,720	336,626	149,627	40,565	13,175	8,359	396

ORG：オリジナル入力又はコピー入力，JP：JAPAN MARC 流用入力，  
LC：LCMARC 流用入力

運用当初は根拠情報の記録を必須としていなかったため、注記自体が記録されていないレコードも散見される。

## 5 . その他の特徴

NACSIS-CAT において、著者名典拠レコードの作成及び修正は、各参加機関の協同分担作業によって成り立っている。各参加機関は、書誌レコードの作成及び修正作業の一環として著者名典拠レコードの作成及び修正を行っている。

従来の目録カードを基盤とした著者名典拠管理システムでは、既に確立した標目はよほどのことがない限り変更することはあり得なかった。

しかしながら、オンライン典拠システムとなって、修正が行われたレコードに関連する全てのレコードについて修正結果を反映することが可能となったことに伴い、典拠の位置付けも変わりつつあるようである。

## 6 . 主要な目録規則との比較

### ( 1 ) 日本目録規則との相違

個人名については、外国人名を対象としていないことと、付記事項における任意規定（「判明するかぎり、すべての人名に生没年等を付記する。」）を採用していることが相違している点といえる。団体名については、団体の内部組織に関する任意規定（「必要に応じて、団体の内部組織を含めた名称を標目とする。」）を採用していることが主要な相違点である。

### ( 2 ) 英米目録規則との相違

英米目録規則については、ほぼそのまま準拠しているため、特に大きな相違点はない。